ゆたかな心をはぐくむ
人権のひろば

子どもの目、子どもの声
人権作文シリーズ【No.71】

◇印からの文章は、先生のコメントです。
◆人権啓発標語
「伝えよう　少しの勇気で　“やめよう”の一言」　菊陽西小学校　6年　穴見　碧唯

問い合わせ
人権教育・啓発課
☎(232)2113

人権ってなあに　シリーズ❽

●子どもの人権～現状～

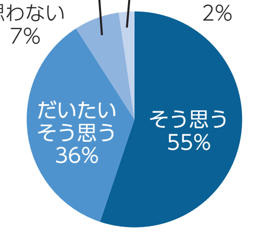
少子化の進行や家庭、地域の子育て力の低下など子どもを取り巻く環境が大きく変化しています。家庭では、子育ての負担に伴う育児不安や育児ストレスの増大などで児童虐待が増加しています。

日本の子どもの貧困率は16・3％。6人に1人が貧困状況に置かれています。近年では福祉の現場でさまざまな問題や課題を抱えた事例が報告され、重要な政策課題として支援が行われています。保健福祉に関わる人たちは、子どもは自身の責任のないところで社会的不利益を被っていると感じています。国は「貧困の連鎖」を防止するため「子どもの貧困対策の推進に関する法律」を作り、取り組みを始めています。

●町の子どもたち

毎年「児童生徒生活実態調査」を行っています。91％が「学校は楽しい」と答え、約1割が「楽しいと思わない」と答えています（グラフ❶）。

グラフ❶　「学校は楽しい」



「学校がある日、家で30分以上家族と話す」子どもは、「毎日」が半数で、約1割が「ない」と答えています。学年が上がってもこの傾向は変わりません（グラフ❷）。

「家族と毎日30分以上会話する」子どものうち、90％が「家族は気持ちを分かってくれる」と回答。会話がないと答えた子どもで「分かってくれる」と回答したのは60％でした。毎日30分以上会話し、「家族は分かってくれない」と回答した子どもは10％でした。

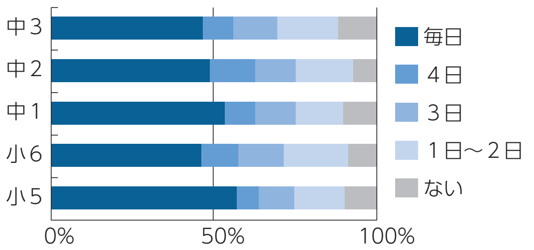
会話がない子どもは40％で「家族は気持ちを分かってくれない」と答えた子どものうち分かってくれる友達もいないと答えたのは全体の5％でした。「友達も家族も気持ちを分かってくれない」と孤立感を感じている子どもたちがいます。

さまざまな形で子どもたちが出しているSOSをしっかり受け止め、安心・安全の居場所づくりに家庭や地域、学校で取り組んでいきましょう。

家庭では子どもと向き合って対話し、きついことやつらいことを乗り越えることが出来るエネルギーを蓄えられるようにしましょう。

子どもは社会の財産で宝です。子どもが夢や希望を持って成長していける社会の実現を目指しましょう。

グラフ❷　「家族と30分以上話すのは」



おばあちゃんと遊んだよ

なかよし園　西本　安璃　6歳

西合志のおばあちゃん、おじいちゃんちに行きました。おじいちゃんはこたつに入って新聞を見ていた。私はおばあちゃんと人形で遊んだよ。畑にはジャガイモやホウレンソウの野菜があった。ホウレンソウとジャガイモを取ってくれたのでお母さんが迎えに来たときおばあちゃんがくれた。家に持って帰って洗って切って食べたよ。とってもおいしかった。

▲おばあちゃんと人形で遊んだよ

◇友達が困っていると声を掛けてくれる安璃さん。友達とドッジボールをしたり編み物でバッグを作ったりして楽しんでいます。縄跳びも目標を持ってこつこつと練習をして、たくさん跳べるようになりました。

▲おばあちゃんの野菜がおいしかったよ

菊陽人りさーち

歩くウィキペディア

増田　創太さん
（14歳・下原）

- **趣味**　曲を聴くこと
- **自慢できること**
  一度取り組み始めたらとことんやります
- **今一番やりたいこと**
  東京に行きたい
- **みんなに伝えたいこと**
  最近眼鏡が壊れました

負けず嫌い

桑住　悠矢さん
（9歳・曲手）

- **趣味**　サッカー
- **得意なこと**
  サッカーのディフェンスが得意
- **今一番したいこと**
  サッカーの試合で優勝したい
- **お父さんに伝えたいこと**
  もっとディフェンスができるよう頑張ります

掲載を希望する人は、はがきか電子メールに「氏名」「年齢」「住所」「連絡先（昼間）」を明記し、〒869-1192　菊陽町役場総合政策課　sogoseisaku@town.kikuyo.lg.jp までお送りください。
注）掲載対象は、小学生以上で菊陽町に居住している人に限ります。親子、祖父母と孫など2人1組での掲載もできます。掲載が決まりましたら、こちらからご連絡します。

きくよう文芸

菊陽句会報

門松や会の行方を寿げり　井　子文
新聞の配達音や寒の朝　財津　早雪
厨ごと終えて鐘の音去年今年　原野レイ子
神苑の一点燃ゆる実万両　力　幸子
山茶花や触るれば散りぬ肩かすめ　寺尾千代子
噴煙の解けゆく空の冬夕焼　髙橋　孝子
春近しかろやかなりし鳥の聲　堀川　妙子
どんど屑逃げまどうなり風のまま　福田　貴子
毎夜見る夢はふるさと春の野辺　佐藤　節
生かされて米寿の屠蘇を頂きぬ　吉野　早苗
何はともあれ健願ひ服のお茶　井上久美子

白川のさざ波に笑む初明り　宮川ユキエ
人参の里と名付けて村気負ふ　日髙　妙子
餅搗や粉とまみれし児の笑顔　曽我　育代
舞ふ人にお捻り飛びてクリスマス　曽我トモ子
添書に友情見ゆる年賀状　紫藤　祥子
凍滝や尖る奈落の夕かげり　村上　朋子
東北の元気頂く年賀状　藤本　純子
心身のほっと息づく七日粥　吉田　幸子
ひゅるひゅると鉄瓶の沸くすきま風　木村　信子
賀状書く母は忙しくペンを持つ　佐藤　健
どんどの帆抗ふ音と美しくあり　佐藤　澄世

短歌会

糯米を洗いて水の冷たさに待ちし孫らの顔も消えゆく　今村　貞子
いにしえのこの地の人も眺めしかはるかな大阿蘇新雪いだく　上野　陽子
初売りの四日の朝に出すキャベツ三日の夕に取らねばならぬ　梅田　國雄
賑やかな声を残して帰りゆく子らも育ちて正月三日　河北　幸一
手折らんと出でたる庭に鳥鳴きて葉群の中に実のなき千両　佐藤せい子
蕗の薹小さな蕾の膨らみを見出でし吾の心弾みし　中村トシエ
声高く木遣りの歌に伴はれ大海原にこぎ出し始む　松岡富紀子
朝まだき匂ひ放てる蠟梅を色鮮やかに照らす月あり　山川　カヅ
音と音が響き合ひつつ新しき音色生まれたりこの空間に　松本　東亜